

# No. 76

2008年（平成20年）

11月1日

発行

浄土真宗本願寺派

和歌山教区日高組

責任者

鈴木 悟 峰



老いの身が  
重き荷物を丸預け  
弥陀の御船に  
乗せられてこそ

妙好人 浅原才市翁



日高組「子どものつどい」ーキッズ・サンガー

## 阿弥陀経に聞く

「舍利弗、かの土をなんがゆゑぞ名づけて極楽とする。その国の衆生、もろもろの苦あることなく、ただもろもろの楽を受く。ゆゑに極楽と名づく」

お浄土を極楽といい、苦しみのない、極めて楽しい世界です。楽しみも煩惱の悦楽の世界ではありません。法楽の世界です。親鸞さまは、お浄土とか安養といつて、極楽といふことばをあまり使っていません。

「また舍利弗、極楽国土には七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹あり。みなこれ四宝周囲し圍繞せり。このゆゑにかの国を名づけて極楽といふ」

極楽の素晴らしい世界のありさまを説いています。一つ一つを挙げれば、宝欄と宝網と宝樹と宝池と階道と楼閣と池華と天楽と雨華と化鳥です。お寺のお内陣やお仏壇がこれに則って作られています。「七重欄楯七重」とは、宝樹をほめたものとして、欄楯や宝網はその宝樹を莊嚴する説と、一つ一つ宝樹のみでなく欄・網・樹の三種の莊嚴を説くと説があります。「欄楯」とは欄干のことです。「七重羅網」は、七層になつていゝ意であり、楼閣や樹木の上の空中を莊嚴する網のことです。「七重行樹」とは七列の並木という意と、根・茎・枝・條・華・果・実の七とする説もあります。江戸時代の大坂の淀屋さんは、実際に寶石を使ってお仏壇を作つたそうです。「四宝」とは、金・銀・瑠璃・玻璃・破瑛・硨磲・赤珠・碼瑙の七宝中の初めの四を挙げて他の二を略したものです。この四宝も、涅槃の四徳を表します。「このゆゑにかの国を名づけて極楽といふ」とあるのが結びの言葉で、極楽の莊嚴は先にあつたように、その住人が受ける楽しみなのでこのような素晴らしいお莊嚴があるから極楽だと結ばれるのです。

(永原)

# 和 讃

宗祖親鸞聖人の説かれたみ教えは殆ど漢文のお聖教が多いのですが、聖人が心血を注いで、ご臨終近くまで筆を染められたことを思うと、その広大な恩徳に報いるべく称名念仏しながら、朝夕拝読するのです。

ご本山本願寺でも別院でも、又各寺院でも、毎晨朝には必ずご和讃を拝読するのです。

どの一首、どの一句を頂戴してみても、往生浄土のおすすめの中に、私が苦悩の人生を如何に歩み行くか、また念仏の教えを疑謗(うたがひ、そしる)する人々と如何に対決するかなどの現実に対するお示しが随処にもなされていると思わずにはいられません。したがってその教えを仰ぐとき、本願を信じ念仏するということですが、果して現実を如何に生きて行くことが出来るかということになると、私自身の人生への態度を決定されてゆくように思えます。毎晨朝にご和讃を拝読しながら、聖人のみ教えに訪い、今日の私の生き方を考えることが大切で

あると思います。初めに二首の無題の和讃があります。この和讃の味わいを述べたいと思えます。

## 冠 頭 讃 (二首)

(真宗の綱要)

弥陀の名号となへつつ信心まことにうるひとは憶念の心つねにして仏思報ずるおもひあり

(大意)

他力の信心を勧められる。

## (解説)

本願を信ずる人は、心にいただいた信心がいつまでも忘れずにつづき、如来の救いを思い出しては喜び、平素は煩惱におおわれて懈怠することが多く、忘れていくけれども、名号が私に届いて、一たび起った信心は消えることがありません。しかし自力のひとたちのように本願に対する疑いが起って信心が断絶するのと違い、煩惱の中にあってももっぱら願力を信じて歡喜愛樂する心は少しも動転することがないのです。

誓願不思議をうたがいて御名を称する往生は宮殿のうちに五百歳むなしくすぐとぞ

ときたまふ

(大意) 自力の心から本願を疑う失を示して疑を滅められる。

## (解説)

願力を信せず、みずから称名を功として、往生の因にしよんとする二十願の自力の念仏者は、真実の浄土へ生まれるのでなく、化土に生まれて五百歳の寿命の間、いたすらに経過して、「含華」とも「胎宮」ともたとえられて、上は仏法僧を見聞せず、下は衆生を救済することなく、いたすらに年数を経過することを示すのです。

称名念仏を、専ら称える人について真と仮とを区別し、第十八願を躰わしたものであります。第十九願はその区別がわかりやすいが、第二十願は同じように称名するから区別がつきにくく、したがって凡夫が多くまどう。そこで今二首をもってその真仮を分かち、要は本願を信するか、疑うかによって分かれることを示し、人々をして方便(仮)を捨てて真実(真)につかじめようとするのであります。

(藤田)

# 法

# 悦

# ケ

# イ

# ズ

## 〔浄土真宗生活信条〕

下の1~3の【 】内にそれぞれ漢字1字を入れて、生活信条の4条を完成させて下さい。

一、み仏の恵みを【1】び  
互いにうやまい【2】  
けあい社会のために【3】します。

75号の正解は①教②正③聞でした。正解者の中から次の方に粗品を進呈いたします。

由良町	岩崎	信子	由良町	畑中	啓子
御坊市	塩田	廣一	由良町	小林	照代
由良町	磯田	富三	由良町	畑中	宏之
由良町	小谷	かおり	由良町	浜崎	香代子
由良町	深海	純子	様	様	様

官製ハガキにクイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、所属寺、御感想、御意見等を明記の上、〒649-1221 日高郡日高町志賀3851 善宗寺内 組長事務所 までお送りください。

※抽選で10名の方に粗品を差し上げます。

※締め切り日 平成21年1月31日

※発表は次号

# 「よき人との出会い」

中学三年生の息子は、野球が好きで没頭している。硬式野球のチームに所属しているのだが、新チームになって主将に指名された。叱られ役である。そんな息子が二年生の秋のことである。練習を終えて、帰ってきた様子がいつもと違う。ひどく落ち込んでい

るのである。尋ねると、今まで指導してくださった監督が都合で辞めると言う。二十代後半のその監督は、指導熱心で練習も厳しい。いつまで走っているのかと思っただけで走っていたことも、しょっちゅうであった。厳しい練習から解放されると思えば嬉しいはずだが、辞めてほしくないと言う。その日の夜、監督への想いを手紙にしたためている息子。明日、速達で出さなければいけない。一週間程して監督からの手紙が来た。監督には戻れない事、技術面でのアドバイス、これからは、総監督、新監督、コーチの言うことをよく聞

く事、甲子園に出場するよいうなことがあれば、仕事を休んででも応援に行く事等、便箋4枚に細かく書かれていたそうだ。そして、最後に書かれていた言葉を教えてくれた。「努力しても成功するとは限らない。しかし、成功している人はみんな努力している。」

良い言葉である。早速、帽子のツバに書き込んでいた。手紙は、机の奥に大切にしまっているようだ。時々、取り出しては読み返しているのだらう。その前監督とは、今でも電話で連絡を取り合っている。今度、焼肉を食べに連れて行つて



もらうそうだ。良き人との出会いと、その言葉によって人は支えられるのである。

(菅原)

## 日高組 キッズ・サンガ

今年も日高組キッズ・サンガ(子どもの集い)を、八月二日(土)に日高町小浦の円行寺で開催しました。



子どもたちは、お釈迦さまにまつわる物語の話しを聞かせてもらったり、影絵「娘さんの贈り物」を、総代会さん、寺族婦人会さん、子どもたちのナレーションにより行なわれました。ふだん騒げない本堂で、にぎやかに座布団ゲームをして楽しく遊びました。そして、夏の思い出作りとして、今年は臭い袋を作りました。

# 門徒心得

## 仏教の旗〈仏旗〉

広くこの世界を照らし、この光をうけたすべての世界のものたちは、苦しみと迷

色々な美しい光が放たれました。青・黄・白・琉璃・瑪瑙などの、その光は広く

いので世界は六道を意味します。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六つの世界を意味します。この六つの世界を六つの色にあらわされました。

仏旗以外にも、吹流や幔幕などもあります。色も三色や五色があります。仏さまの廣大無辺の慈悲は、それらのどの世界にも光を放ちて、あまねくゆきわたっていることをあらわしているのです。



臭い袋を作っている子どもたち

子どもたちは、机の上に選べている、いろいろな種類の香りのする粉や液体を自分の好みに合う香りに混ぜ合せて袋につめてもらい、世界で一つだけの自分の臭い袋に喜んでいました。

また、来年も遊びに来てね。楽しい夏のキッズ(子ども)の輪を作ろうね。

(荻野)

お寺で法要が営まれる際、境内や参道で色鮮やかな旗を見ることがあります。仏旗、または、六金色の旗とも呼ばれています。これは、仏教徒の世界共通の旗です。

旗ができたのは、明治二十年、アメリカのオルコット氏という人が作って日本に伝えたといわれています。緑、黄、赤、白、紫、それに混合色の六金色からできています。

「涅槃経」というお経の中に、「二月十五日、お釈迦さまが亡くなられた時に、お釈迦さまのお顔から

# 日高組寺院めぐり

莊嚴寺(日高町方杭)  
代務住職 鈴木悟峰

(善宗寺住職)

沿革 当寺院は、「比井崎村誌」よれば、往時は古義真言宗であった。

慶長十年、田辺城主杉若越後守の家臣、切目莊を抑えて堀太兵衛門主家が没落し和田村(美浜町)に潜伏するがその後、当地(方杭浦)に移住された。その弟、堀雅楽浪人なる者は、真宗に信奉し、僧名「祐正」を名のり、慶長十二年(一六九七)に方杭浦に道場を開いたのが当寺の始まりとされている。  
元禄十年(一六九七)に本願寺より木仏本尊阿彌陀如来仏像が下付され、享保元年(一七二〇)に寺号「莊嚴寺」の公称の許可を受ける。



以後、十一代を経て無住となるが、隣寺の住職が代務するなどして、お念仏の声を絶やすことなく、今日に至る。

その間、方杭地区には四十戸程度の集落の時期があったようだが、次第に住人が少なくなつた。

現在の本堂は、昭和六十年(一九八五)に、門徒戸数十戸で、再建される。

風雨に絶え老朽化する本堂の再建はご門徒にとつて長年の思いであった。

再建を思うご門徒は長期にかけて再建のための浄財を集めつつ、地元出身のお方から高額の寄附を受け念願の本堂が再建された。

思えば、「お念仏の声を絶やさない」一念であった。

## 年間行事

- ・ 修正会
- ・ 春、秋の彼岸会
- ・ 盂蘭盆会
- ・ 永代経法要
- ・ 報恩講

## その他

- ・ 毎月十五日、ご門徒による本堂の清掃作業
- ・ 代務住職の寺院なので、法要時の莊嚴はご門徒で行っている。

# 眞宗 Q&A

## 死と向き合うこと

— 宗教のいちばん根っこにあるのは、やはり死をどうとらえるかということだと思います。浄土眞宗では、阿彌陀仏の西方浄土を説いています。

大谷 誰しも生まれた以上、死すべきものとして生きているわけですから、死は受け入れるべきものです。逃げたり、ごまかしたりしないで、なんとか受け入れていくというのが、仏教

# 日高組通信

## ☆行事報告

### ・日高組子ども集い

(キッズ・サンガ)

八月二日(土曜日)、円行寺に於いて開催しました。(表紙の写真は、その様子です。)日高組内の各寺院から二十四名の児童が参加し、いろんなゲームや、お香作りをしました。昼食は寺族婦人会の方々が作ったカレーライスを戴き、楽しい一時を過ごしました。

ご協力頂きました各教化団体の皆様に厚く御礼を申し上げます。

・日高組総代会前期研修会  
八月三十一日(日曜日)、一組内寺院めぐり、懇親会を開催しました。

訪問寺院の概要説明やお勧め、作法の研修を受けました。寺院めぐりの後、懇親会では、

の目指すところです。

浄土眞宗はお浄土に生まれて仏になるというのが基本的な教えですから、死ぬのではなくて生まれるのだ、と説明します。

しかし、この世における目に見える人間としての関係は、死によって切れてしまいます。そういう目に見える形あるものだけにしがみついていると、死は受け入れがたくなつてきます。もつと目に見えない世界に基盤があれば、受け入れやすくなる、ということではないでしょうか。

各寺院の状況など懇談し、親睦をはかりました。

### ・第三プロック、門信徒総研修会

九月六日(土曜日)、日高別院に於いて日高組が担当組として開催しました。

参加者は二六〇名、多くの方々のご出席をいただきました。開催に当たり、日高組仏教婦人会・総代会・壮年会・寺族婦人会の会員の方々にご協力を頂き有り難う御座いました。

## ☆行事予定

### ・日高組「眞宗法座」

日時：十二月二十一日(日)

午後一時三十分

場所：由良町里、蓮専寺

ご講師：天岸淨圓師

お誘い合わせご参加下さい。

なお、当日に第七期連続研修会受講者の修了式を実施致します。

### ・「法然と親鸞」観劇の募集

来る平成二十三年から始まる「親鸞聖人七五〇回大遠忌法要」

来世という言葉、この世から向こう側の世界へ行くという時間の前後で考えると、なかなかさびしいところがあるのですが、浄土とは時間的な前・後ろではなくて、この世を超えたさどりの世界という面もあるわけです。この世を一つ超えた世界に生まれ変わるといふふうを受け取ることができれば、単純にこの世を去つてあの世に行くということとは、ちよつと違うのではないのでしょうか。

### 大谷光真ご門主ご著作

「世のなか安穩なれ」より

を記念し、特別公演が全国で上演されています。私たち門信徒にとつては意義深い公演であります。

観劇日：平成二十二年十月十四日(土) 場所：大阪・国立文楽劇場  
日高組内各寺院の門信徒の方々の参加者を募集しています。参加募集の締切は十一月二十日です。  
詳細につきましては各寺院のご住職様にお尋ね下さい。



## 〈訂正〉

75号「法話」の中で誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

【誤】(法話カレンダー4月)  
【正】(法話カレンダー4月)